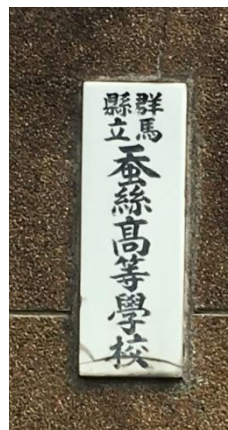


シルクロード (2) ～日本のシルクロード

私は小学生の頃、夏休みになると毎年のように群馬県の安中市にある親戚の家に泊まりに行っていました。親戚の家からは、ごつごつとした妙義山の山並みが見え、周囲には桑畑が広がっていました。叔父が亡くなり親戚の家に住む人もいなくなって、しばらく安中に行くことはなかったのですが、5年ほど前に学校視察で安中総合高校に行く機会がありました。この学校の正門の門柱の後ろ側には、写真のように「群馬県立蚕糸高等学校」と旧校名の表札がありましたし、学校から車で30分ほどで、世界遺産となった富岡製糸場（1872・明治5年設立）に行くことができました。このあたりは養蚕業の盛んな地域だったのです。



殖産興業の旗印のもと、明治時代には外国人技術者の力も借りつつ、近代工業の育成が図られました。江戸時代の初めには、中国からの生糸輸入のために糸割符（いとわっぷ）仲間の制度があって、中国からの輸入に頼るほど日本国産の生糸は品質的に劣っていたのですが、江戸時代後期にはだいぶ品質もよくなり、幕末に開国すると生糸は輸出品の主力になります。明治維新後もこの傾向は続き、政府は製糸業の育成に力を入れます。富岡製糸場には全国から女子労働者（女工）が集められ、技術を身に付けた後故郷に帰って糸繰り（器械製糸）の技術を広めました。それに呼応するように、養蚕業の盛んな関東甲信越地方一円の有力者たちも次々と工場を設立しました。日本の生糸生産及び輸出は急速に増加しますが、それとともに女工の労働問題も起きてきました。

少し回りくどい話になるのですが、私は教師になって2年目の現代社会の授業で、夏休みの課題として数冊の本を指定して、それについてのレポート作成を生徒に課しました。課題提出後読んだ本ごとにグループをつくり、その後数時間調べたり発表用のプリントをつくったりしたあと、代表生徒が発表するというものでした。

課題図書の一つに、山本茂実「あゝ野麦峠」（朝日文庫他）がありました。「あゝ野麦峠」は岐阜県飛騨地方の女性たち（ちょうど皆さんぐらいの年齢です）が、野麦峠を越えて長野県の岡谷にあった製糸工場に働きに来て、つらい経験をしたことをまとめたノンフィクション文学作品で、大竹しのぶさんを主演に映画にもなりました。すでに大正時代には、細井和喜蔵が「女工哀史」（岩波文庫）という同趣旨の調査報告も出しています。

その「あゝ野麦峠」読んだグループの生徒から、「もし女工をしていた人がまだ生きているなら話を聞きたい」と相談がありました。たまたま同僚の先生の高齢のご祖母様が昭和初期に長野で女工をしていたということなので、学校の公衆電話から電話をして、生徒たちは直接話を聞くことができました。

本で読んだ内容から、女工の人たちはさぞ苦勞したことだろうと思ってその方に話を聞いた生徒たちは、「工場のご飯は、家のものよりずっとよかった」とか「ほかの仕事に行くより女工の方が給料が高かったので、うれしかった」などの話をきいて、「先生、どっちの話が本当なのでしょう？」と悩みこんでしまいました。

結局そのグループの発表は、明治時代の女工の労働は大変だったけど、大正時代に入るところから「工場法」（1911・明治44年公布、1916・大正6年施行）などもできて少し待遇が改

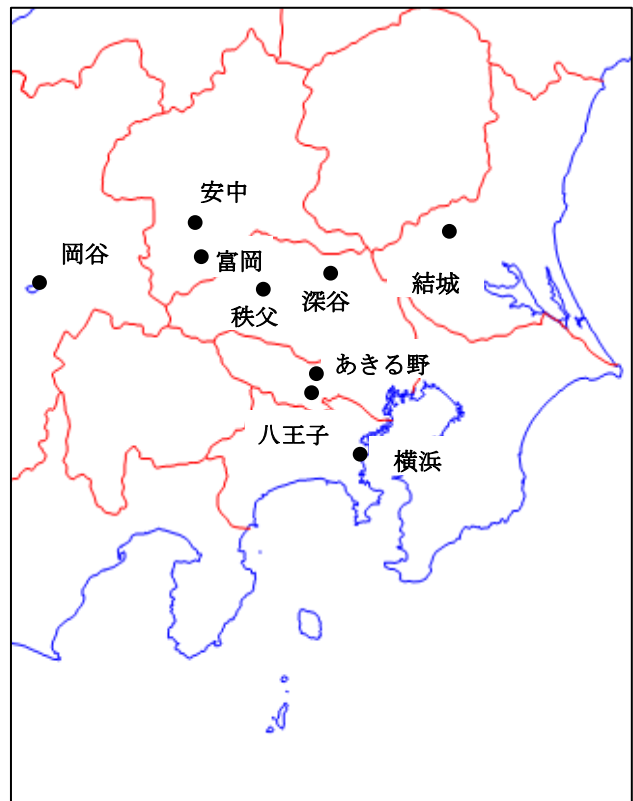
善されたのではないかと、という結論になりました。歴史資料を読み取って評価するというのは、本当に難しいものです。

授業の準備不足を痛感した私は、その2年後に岡谷市に行き、蚕糸博物館や岡谷市役所などでいろいろな資料をもらいました。群馬県の富岡製糸場が国営（官営）だったのに対して、岡谷の製糸場は民営で、もちろん「片倉組」など大工場を営む企業もありましたが、多くは中小工場でした。生産効率を上げるために、女工どうしを競争させて給料に差をつけたり、優秀な女工を他の工場から引き抜いたり、いろいろあったようです。

岡谷で生産された生糸は、山梨県を經由して生糸輸送の集積地であった八王子に運ばれました。横浜線が開通（1908・明治41年）すると、そこからは貨車輸送で横浜港まで運ばれて、海外に輸出されました。このルートも、日本のシルクロードの一つです。

一方、群馬、埼玉、栃木、茨城などで生産された生糸は、当初利根川などの水運や陸路を使って横浜まで運ばれましたが、その後鉄道網が整備されると貨車輸送が中心になります。これも日本のシルクロードです。

最後の話になりますが、私が日本のシルクロードのことをかつて調べていた時に、不思議とそのルート沿いの地域に、明治時代の前期に活躍した人の出生地や自由民権運動に関係した歴史事象が多いことに気がつきました。安中には以前取り上げた新島襄の生家がありますし、埼玉県の深谷は今年のNHK大河ドラマの主人公渋沢栄一の故郷です。自由民権運動の激化事件の一つである加波山事件（1884・明治17年）の舞台となった結城など茨城県の県西部地域、明治時代最大の農民蜂起事件と呼ばれる秩父事件（1884・明治17年）の起きた埼玉県の秩父、五日市憲法と呼ばれる私擬憲法（民間憲法草案）が昭和になってから発見された東京都のあきる野市等々…



いうまでもなく、こんなことは当然これまでも研究されてきていて、日本のシルクロード沿いには養蚕業などで力を蓄えた農民や企業家が居て、その政治的・経済的な力が、時には自由民権運動など政府に対抗する運動を生み出すことになったと言われていました。

富岡製糸場は紆余曲折を経て、岡谷の製糸会社「片倉組」が買収することになりますが、海外での生糸相場の暴落から、昭和の時代に入ると製糸業の斜陽化が進み、現在岡谷やその隣の諏訪にはSEIKO (EPSON) の工場が目立ちます。片倉組も片倉工業として東京に本社を移し、ショッピングモールなどの不動産業を中心とした経営の多角化を進めました。

日本のシルクロードは、進取の精神に富み、時には政府にもタテをつく気概を持った人々を生み出す、エネルギーギッシュな地域でもあったのです。